

おわりに

平成17年度から始まった生命情報学のプログラムを、3年間にわたる特別教育研究経費の支援によって、平成21年度まで実施することができました。羽入佐和子学長をはじめとする執行部の方々、ならびに郷通子前学長の今日までのご指導とご支援に、心より感謝申し上げます。

カリキュラムの実施に際しましては、講義や演習、シンポジウムやセミナーでの講演など、学内外の多くの方々のご協力、ご指導をいただきました。さらに、今年度のインターンシップの実施におきましては、国立遺伝学研究所生命情報・DDBJ研究センターに多大なご協力をいただきました。ここに厚く御礼申し上げます。また、「女性リーダー育成プログラム」における本プログラムの運営には、近藤讓学術・情報機構長、鷹野景子リーダーシップ養成教育研究センター長をはじめ、多くの方々のご理解とご支援をいただきました。女性支援チーム、教務チームをはじめ、事務の各チームの方々には、ひとかたならぬお世話になりました。心より御礼申し上げます。

生命情報学を使いこなせる人材の育成については、社会がその要請を声高に謳っているにもかかわらず、平成17年度までは、本学ではそのための組織立った教育を進める体制が整っていませんでした。過去5年間を振り返ってみますと、平成17年度には学内に点在していた生命情報学教育の芽を発掘して大学院にプログラムを立ち上げ、少しずつ教育体制を整備し、「魅力ある大学院教育」イニシアティブの2年間の支援が終了する段階で、その枠組みをつくることができました。平成19年度以降は「女性リーダー育成」プログラムの支援によってプログラムが大きく育ち、生命情報学を専門とする複数の教員も配置され、平成20年度には生命情報学教育研究センターが立ち上がるまでになりました。生命情報学に携わる教員が大幅に増えたことが、今年度の本プログラムの発展にも大きな後押しとなり、ここにまとめたような成果につなげることができました。平成21年度には、大学院のみならず、学部にも生命情報学副専攻が設置されるに至っており、学部における生命情報学教育への第一歩を踏み出すこともできました。

このように、この5年間で大学および大学院教育にわたる生命情報学教育の幹を作ることができました。学部教育と大学院教育の実質化が大学における教育の大きな問題として議論されているなか、この幹をさらに太く、充実したプログラムに育てていかなければならないと考えております。平成22年度以降も、学内および国内外からの要望を真摯に受け止め、生命情報学教育の発展に努めていく所存でございます。今後ともさらなるご支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成22年3月

女性リーダー育成プログラム

「生命情報学を使いこなせる女性人材の育成」

平成21年度実施責任者 松浦 悦子

生命情報学教育研究センター

センター長

由良 敬